

4月度 コロナの次はバッタの脅威が迫っている

地球環境に学ぶ 小田原一博 記

小学生の頃、パールバック著の「大地」を読んだ。初めて読んだ長編小説にバッタの大群が作物を食い荒らし農民が生活に困窮する場面があり、いまだに鮮明に覚えている。

最近のテレビ、新聞報道は新型コロナウイルス一色だが、昨年末から東アフリカ(エチオピア、ソマリア、ケニア)にかけて、バッタ(サバクトビバッタ)の大発生が起り、穀物を食い尽くし70年に一度の大変な食糧難が来るのではと危惧されている。バッタはさらに東風に乗って中東のサウジアラビア、イエメン、オマーン、パキスタン、インドまで広がっている。新型コロナウイルスに次ぐ世界的な危機となる心配がある。



1.大発生の原因は

昔からバッタの大発生は蝗害(こうがい)と言われている。サバクトビバッタは普段はひっそりと単独生活しているが、食べ物が豊富だと急速に増殖して体の色、形、行動範囲まで激変して群生する。2018年のサイクロンの大雨が切っ掛けとなり、産卵シーズンに雨が多いと草が大量に繁茂し急増したと考えられている。地球温暖化に伴う気候変動がバッタの生息に大きく影響していると思われる。

2.サバクトビバッタとは

乾燥地帯に暮らし、日本のトノサマバッタに似ている。生息環境の変化により、外見や行動パターンが劇変し、集団行動を始めると風に乗って一日に100kmから200kmも移動しながら、行く先々で穀物や果物を食い荒らす。



3.今後の被害拡大

サバクトビバッタは 1000m 以上の高山は越えられないため中東から中国に広がる可能性は低いという楽観的な見解もある。但し沖縄では類似のトノサマバッタの大繁殖が過去にあり安心は禁物。今後、中国や日本まで来るのかが心配。



4.過去の大量発生

- 中国:紀元前からバッタの被害が記録され、現代も続いている。2005 年には海南省を襲った。
- 北アメリカ:1870 年、ロッキードバッタと称され、穀物に大被害を及ぼしたという。1979 年以降は絶滅した模様。
- 日本:1880 年、北海道で大発生、開拓者が入植前で政府はバッタ対策に悪戦苦闘。その後 1971 年に沖縄大東島、1986 年鹿児島馬毛島、2007 年オープン直前の関空で大発生。
- アフリカ:1987 年マリ、1998 年モザンビーク、2003 年チャド、マリ、モーリタニア、2007 年エチオピア、ソマリアからパキスタン、インドに到達。2013 年マダガスカル。

5.駆除策はないのか

殺虫剤を撒くしかないが、広範囲及びため飛行機で撒く必要がある。費用が掛かるため、貧困の現地では十分に対応できない状況。また殺虫剤による環境への影響も心配される。新型コロナウイルス対策に精一杯の各国から支援も少ない状況。

6.バッタは食べられるのか

茨城に住んでいた頃、会社の同僚からイナゴの佃煮を頂いた。始めはイナゴの形そのもので気味悪かったが、食べると美味しい酒のつまみになることを知った。但し「バッタ」と「イナゴ」は姿や形はそっくりだが、「バッタ」は全く美味しくないとのこと。バッタの大発生は、食糧危機の解決策にはなりそうにない。

7.主な情報源

- NHK BS 夕ぐせ 2020.3.16
<https://www.nhk.or.jp/kokusaihoudou/catch/archive/2020/03/0316.html>
- Yahoo News 六辻彰二 2020,3,7
<https://news.yahoo.co.jp/byline/mutsujishoji/20200307-00166447/>
- Wikipedia 蝗害、
- Nature2020.3.8 農作物を食べ尽くすバッタの被害は、温暖化で今後ますます加速する
<https://wired.jp/2020/03/08/the-terrifying-science-behind-the-locust-plagues-of-africa/>

以上

